

紛争地域におけるスポーツのもたらす可能性について

大沼博靖

The possibility to bring the sport in conflict areas
Hiroyasu ONUMA

Abstract : The success of Team Refugee Olympic Athletes in the Rio de Janeiro Olympic gave a glimpse of the inherent media features of sports, highlighting the various problems faced by refugees. In refugee camps in a bad environment, sports that can be played easily without using expensive tools are being implemented. Boys are popular with soccer, girls are popular with volleyball and netball. In refugee camps, learning team activities, sportsmanship and fair play through sports is expected to promote exchanges and mutual understanding among people, and to exert effect in establishing broader identity.

Key words : Team Refugee Olympic Athletes、UNCHR、message forwarding system、social capital

I. 緒言

2016年のリオデジャネイロ・オリンピックでは、国や地域を代表するトップアスリートが魅せるパフォーマンスはもとより、自国外の紛争により故郷を追われた難民選手団の活躍も記憶に新しいところである。

メディアを通じて発信されるスポーツ情報は、世界中に張り巡らされた情報網を伝わり瞬時に全世界に発信される。こういったメディアによる情報発信は、今そこにある事実を映し出す。その意味では、リオデジャネイロ・オリンピックでの難民選手団の活躍や、自国内の人権侵害を公にしたエチオピア選手の動向は、世界中の視聴者に大きな影響を与えたことは間違いない。

スポーツが国際社会の抱える社会的な問題の存在を訴えたメッセージを発信したことは、スポーツがメディアとして機能していることを意味する。単に勝敗や身体的な優位性といった要素だけでなく、社会的な問題に対するメッセージを発信したことに大きな意味があると考えることができる。なぜならば、スポーツは本来、後者のようなメッセージを

発信するメディアとしての役割を担っていたからである。

高度なスポーツ競技会へと昇華する前の古代スポーツは、「葬祭競技はギリシア時代においても、全時代を通して一般的で、「労働と日々」で知られる詩人ヘシオドスもカルキスで王のために葬祭競技に自ら参加したと述べている。また、プラタイエでは、4年毎にエレフテリアと呼ばれる競技会が、ペルシア戦争の戦没兵士のため開催されていた。」¹⁾とされるように、葬祭や祭典的色彩の強いものであった。

しかし、スポーツを構成する重要な要素の1つである競争は、多くの人々の興味を引きつけスポーツの世俗化を加速させていったと考えられている。その結果、大衆の支持を得た古代オリンピックは、1169年という長い間（紀元前776年393年）継続する一大イベントとなった。²⁾この流れの中で、スポーツが本来持つメッセージ伝達機能は、スポーツの表層から姿を消していった。

しかし、表層部の空室となった部分に、多くの人々が期待や感動といった自ら思いを

投影させていった。こうして、スポーツが多義的な意味生成の場となることによって、多くの人々の支持を得るという皮肉な結果となり、このことがスポーツのさらなる発展へとつながっていく。

人類が作り上げた文化としてのスポーツが、音楽や絵画といった芸術が放った強いメッセージ性を持つに至らなかった背景には、多くの人々の思いを投影させる場となったことが、その根底に存在していたと考えるのが自然であろう。

スポーツは本来、メッセージ性が強いものであったことを考えると、難民選手団の活躍によって、本来スポーツが持つこうした機能が悠久の時を経て再起動を始めたと言えなくもない。以下では、主に難民選手団結成の実情、UNITED NATION (国際連合) やUN-CHR (国連高等弁務官事務所)、IOCなどが実施している方策、難民を多く抱える地域のスポーツ事情などを通じて、スポーツの持つ可能性を考えていく。

II. 紛争地域とスポーツの関係性

スポーツ競技の栄光は個人に帰することは周知の事実であるが、オリンピックをはじめとする大規模スポーツ競技会が、ナショナリズムを高揚させる政治的な意味合いが強いことは、ナチスのオリンピックと呼ばれた1936年のベルリン・オリンピック、パレスチナゲリラが選手村のイスラエル選手団を襲っ

た1972年のミュンヘン・オリンピック、西側諸国が参加をボイコットした1980年のモスクワ・オリンピックなどにおいて顕著であった。

表1は、オリンピックと関連した紛争とその影響を表したものである。ハンガリー動乱では、当時世界ナンバーワンと評されていたサッカーのハンガリー代表が弱体化するきっかけとなった。メキシコ・オリンピックは、泥沼へと突入するベトナム戦争や人種差別問題が大きな社会問題となっていた時期であった。黒手袋で人種差別への抵抗を見せた米国のアスリートたちは、その後、米国陸上競技連盟から永久追放の憂き目にあっている。

イスラエル選手団が襲撃されたミュンヘン五輪の惨劇は、いまだに語り継がれるものである。政治体制や人種問題が発端となった紛争は、アスリートだけでなく多くの市民も巻き込むものであった。多くの人々が注目を集めるオリンピックは、プラスマイナス双方の影響を多くの人々に与えている。

紛争が多くのアスリートの夢を打ち砕いてきたことは間違いない。東西冷戦が終わり、イデオロギー論争が一定の終着を見た後も、宗教や民族といった要因での紛争が後を絶たない。犠牲となるのは子供や高齢者といった社会的弱者たちであるが、社会のロールモデルでもあるアスリートも少なからず影響を受けてきた。

表1 五輪と紛争の関係

オリンピック大会	紛争	影響
1956年メルボルン	旧ソ連のハンガリー侵攻、スエズ動乱	ボイコット
1968年メキシコ	ベトナム戦争による学生運動の鎮圧、アメリカの人種問題	ブラックパワーの挙手
1972年ミュンヘン	アラブ-イスラエル紛争	ボイコット
1976年モントリオール	チャイニーズ・タイペイ呼称問題	ボイコット
1980年モスクワ	旧ソ連のアフガニスタン侵攻	ボイコット
1988年ソウル	二つのコリア	ボイコット
2000年シドニー	先住民 (アボリジニ) の政治的問題	先住民の反対運動
2003年3月	イラクでのアメリカ主導の戦争	IOCがイラクのNOC資格停止

Ⅲ. 難民選手団 (Team Refugee Olympic Athletes) について

2016年6月3日、国際オリンピック委員会は同年にリオデジャネイロで開催されるオリンピックに向けて難民選手団を結成している。その際に以下に示した次項が承認されている。3) これにより、国内紛争や政情不安により他国へと逃れたアスリートの中から選抜された男女10名が晴れてオリンピックとなった。

- チーム名は、Team Refugee Olympic Athletes とする。
- 他のチームと同様に選手村での入村セレモニーに参加できる。

- 他のチームと同様に選手村を使用できる。
- 選手が必要とするコーチ、技術スタッフの帯同を認める。
- ユニフォームはIOCが提供する。
- 表彰式などチームに関わる公式な場面では、五輪旗を掲揚し五輪歌を流す。
- 開会式において、チームは開催国ブラジルの前を行進する。
- 適切な保険を使用する。
- 世界ドーピング機構によるドーピングコントロールが適用される。
- オリンピック・ソリダリティーが渡航費用などを負担し、大会後もチームのサポートを継続する。

表2 リオデジャネイロ五輪 難民選手団 (10名)

氏名	年齢/出身	種目
Rami Anis	25歳、シリア出身	100mバタフライ
Yolande Mabika	28歳、コンゴ民主共和国出身	柔道女子63キロ級
Paulo Amotun	24歳、南スーダン出身	陸上男子1500m
Yusura Mardini	18歳、シリア出身	女子競泳200m自由形
Yiech Pur Biel	21歳、南スーダン出身	陸上男子800m
Rose Nathike	23歳、南スーダン出身	陸上女子800m
Popole Misenga	24歳、コンゴ民主共和国出身	男子柔道81キロ級
Yonas Kinde	36歳、エチオピア出身	マラソン
Anjelina Nadia Lohalith	21歳、南スーダン出身	女子陸上1,500m
James Nyang Chiengjiek	28歳、南スーダン出身	男子陸上800m

表2からもわかるように、南スーダン出身の選手が半数を占める布陣となっている難民選手団は、アフリカ大陸の国々の選手によって構成されたチームである。⁴⁾ 彼らのコメントを見る限り、自らの活躍によって故郷の人々(や困難な境遇にある人々)に希望を見出させたいという思いが見て取れる。⁵⁾

- 「今私にできることは、一生懸命練習して本番で自分の力を出し切るだけです。リオでは、支えてくれるすべての人々の想いをのせて走ります。私の走りを通して、周りの人に勇気や希望を与えたいです」(Rose Nathike)

- 「僕は難民の代表として走ります。テレビやフェイスブックを通して、自分の勇姿を難民キャンプにいる仲間届けたいです。そして良い結果を残して、家族や友人に恩返ししたいと思います」(Paulo Amotun)

自己目的的に見れば、彼らは彼らのためにスポーツをするのだが、その一方で、自らの置かれている状況に対する意識は人一倍高いことがうかがえる。使命感がプレーにどのような影響を及ぼすかについては言及しないが、彼らの見せるパフォーマンスが、プラスのメッセージとなって多くの人々に届いていることは疑いのない事実である。

IV. 紛争地域におけるスポーツ

小林は「英領アフリカにおいては、将来現地人エリートとなる少年たちの教育にクリケットやサッカーなどが取り入れられ、サッカーその他の近代スポーツを文化変容の手段として重要視していたことが記されている」⁶⁾と指摘している通り、19世紀からアフリカやアジア、オセアニアなどへと進出していったイギリス以外のヨーロッパの各国も、スポーツを政治的な支配のツールとして活用していた。

元々はイギリス領であった南スーダンではバスケットボールやサッカーが盛んであるが、伝統スポーツも非常に人気がある。特に収穫後に行われるレスリングは人気があり多くの観衆を集めている。60を越す部族が存在するため、部族間の融和をはかるためにスポーツの果たす役割は小さくない。

ベルギー領であったコンゴ民主共和国では、アフリカ大陸選手権を2度制した(1968、1974)サッカーが人気だが、バスケットボールやハンドボール、バレーボールといった球技も人気のスポーツとして広く実施されている。

フランス領であったシリアも、やはりサッカーが盛んな土地柄である。国内情勢が混乱するまでは、女性のスポーツ進出も他のアラブ諸国に比べて進んでいた。しかし、シリア内戦の激化、ISの侵攻などによって状況は激変している。

住居を追われた人々は難民となり、自由を求めてトルコ→ギリシアと経由しドイツを目指すことになった。出国できる人々は恵まれている方であり、自国に留まらざるを得なかった人々は難民キャンプの悪条件下での生活を強いられている。こういった状況を、スポーツによって打開していこうという動きも活性化してきた。

エチオピアも他国と同様にサッカー人気が高いが、古くはオリンピックのマラソン競技で史上初の連覇(1960、64年)を成し遂げたアベベ・ビキラに代表されるように、陸上競技の長距離種目では、ケニアと並ぶ世界有数の強豪国として有名である。他の国々と異な

るのは、リベリアと並び植民地となったことがない点である。しかし、

Global Trends 2016(年間統計報告書)によると、2016年末時点で移動を強いられた人の数は6560万人と推計されている。これらの人々は、難民、国内難民、庇護申請者の3要素からなる。最多の難民発生国はシリアの550万人であり、南スーダンでの紛争が新しい難民の発生原因といわれている。⁷⁾

劣悪な環境下での生活は、精神的身体的荒廃へとつながる。2013年4月6日、国連総会において国連スポーツデーが制定された。これは、協調性、連帯感、相互理解、健康維持といった分野に効果が期待できるスポーツの力を、世界の発展や平和に寄与することを目指したものである。

V. スポーツプログラムとソーシャルキャピタル

UNHCRは、コミュニティ間の相互理解や忍耐の獲得を目指し、難民キャンプの子どもたちを育成するプログラムを長年にわたって実施してきた。更に、ナイキ、FCバルセロナ、IOC、バレーボールやバドミントンなどの国際連盟などと協力し、その活動を拡大している。

A Team Project for the MSA 2013 in collaboration with UNCHRによる2013年の難民キャンプで実施されたスポーツプログラムについての報告書「AISTS MASTERING SPORTS」⁸⁾によると、難民キャンプで実施されるスポーツは、プレーのわかりやすさなどからサッカーやバレーボールが活用されているという。

特にサッカーは、用具を使用せずチームワークの大切さを学べることに加え、難民キャンプの子どもたちにとっては、世界的なスタープレイヤーがロールモデルや目標となるなど大きな役割を担っている。

しかし、女性にとってはコンタクトスポーツであるサッカーを好まない人々もおり、特にバレーボールやネットボールなどが人気である。遊びも難民キャンプでは用いられることが多い。しかし、教師役となる指導者が必

表3 難民キャンプで実施されるスポーツプログラム＊)

スポーツ	利点	欠点
サッカー	実施し易さ、実施費用の低さ、普及度、役割の多さ、チームスポーツ	接触のあるスポーツ、競争心が必要、軋轢、緊張、または文化的宗教的対立、多くの社会にとって女性に対しては文化的受け入れが困難
バレーボール	実施し易さ、実施費用の低さ、普及度、	柔道女子63キ口級
ほとんどの女性難民が受け入れやすい		陸上男子1500m
ネットボール	実施が極めて容易、実施費用の低さ、難民コミュニティにおいて女性の人気が高い、チームスポーツ	男性には人気がない
ボクシング	男性の人気が高い	実施の技術的難しさ、用具に費用がかかる、暴力的と見られる、(難民)キャンプにおける社会では受け入れがたい、性的問題、普及度が低い、個人スポーツである
ヨガ	手軽な用具で実施できる、実施費用の低さ、レベルに応じた難しさ、個々や協力して練習できる	実施の技術的難しさ
文化的な互換性がない	24歳、コンゴ民主共和国出身	男子柔道81キ口級
アルティメット	手軽な用具で実施できる、実施費用の低さ、ルールが理解し易い	普及していない、役割モデルが不足している
遊び	誰もが楽しむことができる、教育的である、大勢で実施できる、理解が容易	教師が必要される、スポーツが好まれる
James Nyang Chieng-jiek	28歳、南スーダン出身	男子陸上800m

出典：UNHCR 「AISTS mastering sports」

要となるケースから、スポーツが好まれる傾向にあるという。

スポーツを活用して地域や人々の生活環境を改善し、生きるための目標を提示するといった方法は、難民キャンプだけでなく広く一般的に行われている方法である。難民キャンプのそれは、地域間の紛争、人種問題、宗教対立、経済格差などが根底にある。様々な問題の結果生じる緊張や軋轢を、スポーツを通じて解消しようとするものである。普及度やプレーの容易さ、ルールのシンプルさなどが利点として挙げられていたが、社会を再構築するためのツールとして活用度が高い方法である。

協働して物事に取り組める信頼関係のある

社会や組織の構築に寄与するという意味では、スポーツはソーシャルキャピタルの概念を実現するためのツールとしてとらえることができる。ロバート・パットナムは、ソーシャルキャピタルを「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と定義づけている。⁹⁾

「SCにはいくつかの分類軸がある。その中で、SCの概念を理解する上で最も基本的な分類が、「結合型 (bonding)」と「橋渡し型 (bridging)」というものである。」¹⁰⁾ 結合型について集団内に強い結束力を作り上げ、外の集団に対して敵意を生み出す。一方で後者については、外部資源との連携、情報伝達

に優れており、より広いアイデンティティや互酬性を生み出すとされる (SCはソーシャルキャピタル) (表4)。

それぞれの地域の状況によっても方法は異なるものとなる。前述した様に、サッカーは非常に有効なツールとして考えられているが、物理的なスペースが存在しない場合や対

象者が女性中心の場合などは、別なスポーツの方が適していることが指摘されている。どのような状況ならば何を選択するべきか、その際に気を付けるべき点は何なのかが整理されることによって、より効果効率的に活動を推進することができるだろう。

表4 バットナムによるソーシャルキャピタルの分類

性質	結合型 (例: 民族ネットワーク)	橋渡し型 (例: 環境団体)
形態	フォーマル (例: PTA、労働組合)	インフォーマル (例: バスケットボールの試合)
程度	厚い (例: 家族の絆)	薄い (例: 知らない人に対する相槌)
志向	内部志向 (例: 商工会議所)	外部志向 (例: 赤十字)

出典 「A Team Project for the MSA 2013 in collaboration with UNCHR」 坂本治也、2002、ソーシャル・キャピタル研究会 (OSIPP)

VI. まとめ

スポーツが本来持つメディアとしてのメッセージ伝達機能が、国際社会情勢の不安定化の中で再び表舞台へと姿を現してきている。特にリオデジャネイロ・オリンピックにおける難民選手団の活躍は、難民として過酷な環境下で生活している人々の存在を改め再認識させる機会となった。

劣悪な環境下では、倫理観や規範を持って行動することは難しい。スポーツを通じたチーム行動や、スポーツマンシップ、フェアプレーを学ぶことは、人々の交流と相互理解を促し、より広いアイデンティティの確立に効果を発揮することが期待される。様々な難民キャンプにおいてスポーツプログラムが用いられる要因の1つはここにあるだろう。

難民キャンプや紛争地域では、団結やチームワークによって長期的な態度や行動の変容、相互理解の促進、忍耐、社会的結束を導く役割の一部をスポーツが担っていると考えられることができる。その意味では、スポーツは橋渡し型のソーシャルキャピタルの醸成を導く重要なツールであり、国際平和の構築に大きな役割を果たすことは疑いのない事実であろう。

【参考文献】

- 1) 木村吉次『体育・スポーツ史概論』市村出版、pp11、2001年
- 2) 公益財団法人日本オリンピック委員会公式サイト
- 3) IOC公式サイト「Team of Refugee Olympic Athletes (ROA) created by the IOC」
- 4) UNCHR公式サイト「Refugee Olympic Athletes-background information」
- 5) UNCHR公式サイト「リオ五輪「難民選手団」10人の声」
- 6) 小林勉「現代メディアスポーツ論 (第10章)」世界思想社、pp224
- 7) UNCHR公式サイト2017.6.19「プレスリリース」
- 8) A Team Project for the MSA 2013 in collaboration with UNCHR「AISTS mastering sports」
- 9) ロバート・バットナム「哲学する民主主義」NTT出版、2001
- 10) ソーシャル・キャピタル研究会 (OSIPP) 「A Team Project for the MSA 2013 in collaboration with UNCHR」2002.